

◆病院の理念◆

社会のニーズに応える安全で質の高い医療を皆様に提供するとともに良識ある人間性豊かな医療人を育成します。



高度先進医療
BNCTの
さらなる飛躍へ
新病棟建設がスタート

病院長 内山 和久



謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

皆様方におかれましては、よき新春をお迎えのことと、心よりお慶び申し上げます。本年も大阪医科大学附属病院をよろしくお願いいたします。

さて、本年は本学敷地内に関西BNCT共同医療センターが設立されます。次世代の有力ながん治療法として注目されているBNCT（ホウ素中性子捕捉療法）とは、加速器から発生する中性子とホウ素の反応を利用し、正常細胞にほとんど損傷を与えずにがん細胞のみを選択的に破壊する画期的な治療法で、現在悪性脳腫瘍と頭頸部のがんに臨床効果が認められていますが、順次適応が拡大されることが期待されています。再発がんや浸潤がんなど治療困難ながんにも効果が期待でき、外科治療を行わないので患者さまのQOL向上にも貢献できます。本施設は地下1階・地上3階、延べ床面積4,017平方メートルで、1階に治療室、2階に陽電子放射断層撮影装置（PET）検査室を設け、治療室には最新式の小型BNCT用加速器（サイクロトロン）を設置します。本年6月に開設し、来年8月から治療開始予定です。

2016年3月には増加傾向をたどる手術症例に対応できるように、病院西側に6階建ての中央手術棟が竣工しました。2、3階に計20室の手術室と16床のICU、そして4階には胸部外科病棟、5階には消化器外科病棟が配置されました。手術室にはハイブリッド手術室や内視鏡外科手術室、ロボット手術室などの最新設備が施され、昨年は10,000例を超える手術が施行されました。今後さらに症例増加が見込まれています。

本年からいよいよ具体的な新病棟建設がスタートします。2018年4月から現在の5号館と隣接する臨床講堂棟を解体した後、まず北側に12階のA病棟が建設されます。その後、南側に外来を主とするB病棟が建築され、6号館を改築した管理棟の設立、7号館の改築などすべてが整備されるのはほぼ10年先、つまり大阪医科大学創立100周年を迎える頃となります。

われわれ職員一同は、今後とも日ター丸となって高度先進医療を推進するとともに、患者さまとご家族に安心と安らぎを与えられる病院を目指しますので、本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

迎春

連携を大切に
中核病院として
信頼に応える
看護を目指して

看護部長 西山 裕子



謹んで新年のお慶びを申し上げます。

本年の干支は「戌」。犬は人間の身近な存在として、物語にもよく登場します。「桃太郎」「花咲じい」「忠犬ハチ公」「南極物語のタロとジロ」「フランダースの犬」「ワンワン物語」「名犬ラッシー」「西郷隆盛の犬」…どの犬も正直で頭がよく正義感があり、心優しく節度を守って行動することができる存在です。社会情勢が混とんとしている今だからからこそ、真摯な生き方を「犬」に習って見つめ直す必要があるのかもしれません。

さて、ご承知のとおりわが国の高齢化は急速に進展し、100歳以上の「センテナリアン（百寿者）」と呼ばれる人も6万1,000人以上となり、2050年までに100万人を突破するとも言われています。病気の構造も慢性疾患中心型になるとともに、要介護者の大幅な増加がもたらされ、国民負担や公費負担の限界をめぐり医療経済の状況も年々厳しくなっております。この対策として「地域包括医療ケアシステム」が策定され、従来の病院完結型から医療・ケアと生活が一体化した地域完結型へとすでに転換が図られてきております。現在「平均寿命」と「健康寿命」の差の日本の平均は10.9年であり、健康管理・疾病予防はこの地域の課題とも言えます。健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる「健康寿命」を保持し、その人らしく住み慣れた場所で寝込むことなく最期を迎えるか、平均寿命と健康寿命の差を縮めるかは、地域のそして一人ひとりの課題となっています。

本院は医療に関わる次世代を育成しつつ高度医療を提供する「特定機能病院」として、日夜努力し続けております。「特定機能病院」は、「かかりつけ医」と役割分担し協力し合い、より高度な専門医療を必要とする患者さまや、病気が進行中の急性期の患者さまを見ることを役割としています。大阪医科大学は「健康科学クリニック」「訪問看護ステーション」「三島南病院」と、未病から在宅、療養から看取りまで組織体制を整えています。また、それだけにとどまることなく「地域中核病院」として、顔の見える関係を大切に連携を強化しておりますが、今後もさらに皆さまの健康寿命を支えるキーパーソンとなり、「適切なケアを提供でき、多職種と共に必要なサービスや地域をつなぎ、患者さまの生活を支えること」を目指し努力して参りたいと存じます。その人らしい人生に寄り添うことを忘れることなく、信頼に応える看護サービスの提供を目指し、職員一同真摯に努める所存でございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

栄養サポートチーム（NST）の活動紹介

普段、元気なときは栄養のことなど気にしたことがないという人がほとんどではないでしょうか？

しかし、病気になって活気がなくなると食欲が低下するだけでなく、病状によっては食事が摂れなかったり、栄養が偏ったりするなどして栄養不良になります。特に、高齢の方は入院時にすでに栄養不良であったり、長期の入院中に栄養低下が進んだりします。そして、栄養不良は日常の生活活動の範囲を狭めるだけでなく、筋力・体力、免疫力、自然治癒力、認知機能などの低下につながり、病気や怪我の治療そのものにも悪い影響を与えます。

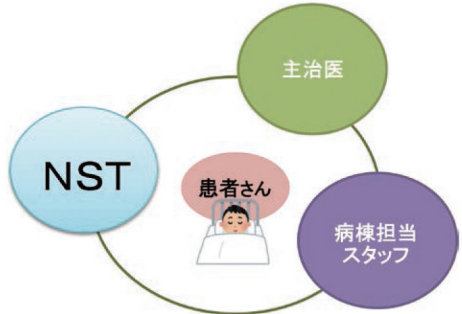
そのような方々に栄養面から積極的に関与してサポートするのが、私たち栄養サポートチーム（NST）の大切なミッションです。

NSTは医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、歯科医師、歯科衛生士、言語聴覚士、臨床検査技師、事務職員など多くのメンバーから構成されています。患者さま一人ひとりの栄養

状態を評価し、それぞれの立場から専門知識をもって適切な栄養摂取・管理の方法を提案します。そして、このような栄養状態の維持・改善が、入院患者さまの治療効果の向上や病状の回復につながると大いに期待されています。

火曜日と木曜日に病棟を回診しながら、サポートを依頼された患者さまの病気の回復に必要な栄養を評価し、必要なエネルギーや栄養素を考慮した食事や補助栄養剤、輸液の提供など、質の良い栄養を主治医にアドバイスします。また、食事からの栄養・エネルギー摂取が不十分な場合あるいは不適切な場合には、患者さまの意向や病状に合わせて輸液や経腸栄養などの開始や変更、管理方法の調整などを主治医や担当看護師とともに検討したり、提案したりします。そして、ご要望に応じて、退院後の食事や栄養に関する相談にもお答えしています。

ご自身あるいは入院されているご家族の食事や栄養状態に不安を感じたり、心配されたりしている方は、担当の医師や看護師、管理栄養士にお気軽にご相談ください。



市民公開講座

平成29年9月16日開催

本邦における産科医療の現状と課題

産婦人科学教室 藤田 太輔



本邦における産科医療の現状と課題について講演させていただきました。

① 本邦の出生数と晩婚化

1975年は年間200万人だった出生数は年々減少し、ついに2016年の年間出生数は100万人を下回る98万人であったことが報道されました。また晩婚化も深刻な問題であり、現在の平均結婚年齢は男性で31歳、女性で29歳です。この原因はさまざまですが、結婚・出産に対する意識の変化や若い世代の所得低下、依然として厳しい女性の就労継続が原因とされています。

② 産科医療の現状と課題

戦後の周産期医療の進歩から母児の死亡率は劇的に減少し、お産の「安全神話」が本邦では流布しました。しかし2006年頃からその「安全神話」の崩壊、すなわち産科医療の崩壊がマスコミで報道されるきっかけとなったニュース（福島県立大野病院事件、大淀病院事件、都立墨東病院事件など）について解説しました。結果として産科医は減少し、分娩施設は減少の一途をたどっています。今後の産科医療の制度改革として、分娩施設を減らして産科医のマンパワーの集約化、産科の女性医師の働きやすい職場環境づくり、主治医制度の廃止などが検討されています。

③ 最近の産科関連のニュース

無痛分娩にまつわる重大事例や、産科医の過労死、臍帯血の脳性麻痺治療について紹介しました。

④ Take home message

妊娠を考えている女性は、重篤な胎児先天疾患（二分脊椎や無脳症）を予防するために、妊娠前より妊娠12週まで、葉酸サプリメントを摂取することをお勧めしました。

⑤ 本院産科の紹介

本院には30人近い産婦人科医が在籍しており、年間450例くらいの分娩を取り扱っています。ハイリスク分娩管理からリスクのない正常妊婦まで、すべての妊婦さんに安心安全な医療を提供しています。

平成29年11月18日開催

胃もたれ、胃痛、むかむか！
それは機能性ディスペプシア？

先端医療開発学講座 富永 和作



日常診療において、胃もたれ、胃の痛み、むかむか感などを訴える患者さまとお会いすることは、決してまれなことではありません。近年そのような訴えを有する患者さまたちに対する疾患概念が確立され、「機能性ディスペプシア」と言います。

機能性ディスペプシアとは、上部消化管である胃・十二指腸に明らかな粘膜傷害（粘膜のキズ）は認められませんが、6カ月以上前から連続的あるいは断続的に続く上腹部症状を有する疾患と定義されています。その病態生理には、消化管の生理機能異常が関与しています。胃酸分泌や消化管運動といった本来ある生理機能と関連するのです。これまでに、さまざまな病態解析研究や治療介入試験がなされてきました。その一方で、患者背景に心理社会的要因が強く関与するとの見地から、抑うつや不安につながる身体的・精神的ストレス、自律神経系との関連性も示されてきました。しかしながら、これら個別の評価のみでは病態生理を説明することが困難な慢性疾患であるとも言われています。つまり、古くからある「脳腸相関」という概念、中枢である脳と末梢にある消化管との生理的動きは双方向性に作用するとの概念から、脳と消化管との包括的な理解が本疾患においても重要とされています。

最近の知見を含めた病態生理や、現在使用されている薬剤での治療成績・効果についてわかりやすく概説させていただきました。

平成29年12月16日開催

口の中のできもの
—それ、放っておいて大丈夫??

耳鼻咽喉科学教室 東野 正明



“口”にはさまざまな機能があります。噛む、食べる、飲む、話す、味わう、歌う…。

もし、その“口”にできものができたらどうなるでしょう？このようなたくさんの楽しみが奪われてしまうかもしれません。それだけではなく、そのできものが悪性腫瘍（がん）であれば放っておくと生命に関わることになります。

口の中にできる悪性腫瘍＝「口腔がん」の治療は、耳鼻咽喉科・頭頸部外科が担当しています。口腔がんの治療の基本は手術です。早期がんであれば、ほとんどの場合で大きな機能的な問題を生じることなく、元の生活に戻っていただくことが可能です。しかし、腫瘍を放っておいて病状が進行してしまうと大切な機能を犠牲にせざるを得なくなり、さらに形を作り直す手術（再建術）も必要になってきます。特にそのような場合には、われわれ耳鼻咽喉科・頭頸部外科医だけではなく、他科の医師、看護師、薬剤師、歯科衛生士、理学療法士、言語聴覚士など多職種のプロが力を合わせ、チームを作って、病気に立ち向かっていく必要があります。

それよりも大事なことは早期発見し、早期治療をすることです。

開催のご案内

大阪医科大学附属病院 がんセンター
第5回市民公開セミナー

テーマ：みんなで学ぼう がん医療『泌尿器がん・子宮がん』

開催日：平成30年2月17日（土）午後2時～4時30分

場所：大阪医科大学 新講義実習棟 P101

プログラム：Ⅰ. 腎泌尿器外科の低侵襲手術	腎泌尿器外科	稲元 輝生 先生
Ⅱ. 婦人科がん治療の最前線	婦人科・腫瘍科	寺井 義人 先生
Ⅲ. 泌尿器・婦人科がん治療後のヘルスケア	婦人科・腫瘍科	佐々木 浩 先生
Ⅳ. 心に花を咲かすメイクセラピー	看護学部看護学科	カルデナス暁東 先生
Ⅴ. 治療中の生活について	病院看護部	今井 麻里子 先生

【詳細は、院内のポスター・チラシ・ホームページをご覧ください】

『ベビーマッサージ』ははじめました！

産科病棟 看護師長・助産師 英 都貴子

ベビーマッサージは、お母さんが赤ちゃんの体に触れることで、赤ちゃんの脳や心身の発達を促しリラックスする効果があると言われています。また赤ちゃんだけでなくお母さんもストレス解消になり、育児へのゆとりがもてるようになると期待されています。



本院では、平成29年10月11日に初回のベビーマッサージクラスを開催いたしました。育児についての悩みなども話し合われ、参加されたお母さん同士で「気分転換にもなった」と大変好評でした。

マッサージを通して赤ちゃんに触れ合い、育児中のお母さんたちと話をしながら楽しい時間を過ごしてみませんか。スタッフ一同、ご参加をお待ちしています！

ベビーマッサージクラス

【開催日時】第2・第4水曜日10時～12時・13時30分～15時30分の1日2回（1回5組まで）

【担当者】助産師

【対象者】本院で出産された生後1カ月～1歳までの赤ちゃんとお母さん（お父さんの参加も可能です）

【場所】6号館3階 産科病棟前指導室

【料金】1回1000円

【申し込み・問い合わせ先】平日14時～16時 産科病棟（63病棟）にお電話ください

看護スペシャリスト
専門看護師・認定看護師の活動

Part 13



“からだ”と“こころ”、
そして“患者さま・ご家族”と
“医療者”をつなぐことを大切に

リエゾン精神看護専門看護師
宮田 郁

リエゾン精神看護専門看護師は、身体疾患をもつ患者さまが“こころ”に不調を感じた時に関わらせていただく看護師です。聞き慣れない名前ですが「リエゾン」という言葉はフランス語で“つなぐ”“橋渡し”という意味があります。“からだ”と“こころ”、“患者さま・ご家族”と“医療者”、医療者間をつなぐことが大きな役割になります。さまざまな疾患をもつ患者さまとご家族のメンタルヘルス支援（ストレスや精神的疲労、不安の軽減や緩和を意味します）を行うことで、より良いQOL（Quality of Life：生活の質）を目指したいと思っています。しかし、メンタル面の問題の背景には、身体的・社会的な問題などさまざまな問題が絡み合っていますので、私ひとりではなく、医師、それぞれの領域の看護師・助産師、ソーシャルワーカー、リハビリセラピストなど多くの職種との協働が欠かせません。

メンタルヘルス支援は診療科を限定するものではありませんので、周産期や小児科、内科、外科など多岐にわたる診療科で、かつ入院、外来関係なく関わらせていただいています。これから一人でも多くの患者さま・ご家族が安心して病気と向き合えることができるよう、メンタルヘルス支援に努めたいと思います。

情報コーナー

院内コンサート

大阪医科大学附属病院外来ホールにおいて、9月9日午後2時から、毎年恒例の院内コンサートを開催しました。本学学生で編成される管弦楽部とグリー部による奥行ある演奏と合唱に続き、星賀正明専門教授夫妻のピアノ連弾、浮村 聡専門教授の男声二重唱、そして、花房俊昭名誉教授のバイオリン独奏が行われ、最後は、会場内の皆さまと一緒に「ふるさと」を大合唱しました。

